

コラージュを用いたキャリア教育に関する一考察

—中学生の女子におけるキャリア教育に焦点をあてて—

伊藤 嘉奈子 (子ども心理学科・准教授)

工藤 吉猛 (鎌倉女子大学中・高等部)

A Study of the Effects of Bringing Collages into Career Education: Career Education for Junior High School Girls

Ito, Kanako

Kudo, Yoshitake

Abstract

The purpose of this study is to investigate the effects of bringing collages into career education for the first graders in a junior high school. First, the teacher asked students to select a collage to learn a job. Next, the teacher divided the students into several groups and asked them to talk about various jobs based on the collages. A "Career Maturity Attitude Scale" questionnaire was implemented before and after the learning. The results show that their awareness/interest toward their future career and their consciousness about the importance of their career choice changed positively after the lesson.

Key words : career education, collage, Career Maturity Attitude Scale, career concern, view of occupations

キーワード：キャリア教育、コラージュ、進路成熟態度尺度、進路関心度、職業観

1. 問題と目的

最近の生徒たちは、情報社会に生きていながら知っている職業数が少ないと筆者らは感じている。このような中で、特に、多くの生徒は将来母親となり次世代の育成を担う立場ともなるので、ライフプランとしてのキャリア教育を充実させることが女子教育におけるキャリア教育において、重要と考えている。青島(2001)は、「女性の職業生活は、結婚、配偶者の転勤、出産、育児などのライフイベントによって、大きく左右され」、女性が人生を考える際は、「職業生活だけでなく、私

生活を含むトータルな視点から考えることが必要」と述べ、男性モデルを想定した職業選択や働き方ではなく、女性の生き方を考えることが重要であるとしており、女子を対象としたキャリア形成研究の重要性が示唆されている。

ところで、キャリアという語句の定義は様々あり統一されていないのが現状である。キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告(2004)では、「キャリアとは個人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及び、その過程における自己と働くこととの関係づけや価値付

けの累積」としている。また、金井（2002）はキャリアを「成人になってフルタイムで働きはじめて以降、生活ないし人生全体を基盤にして繰り広げられる長期的な仕事生活における具体的な職務・職種・職能での諸経験の連続と節目での選択が生み出していく回想的な意味づけと将来構想・展望のパターン」であるとしている。さらに、仙崎・野々村・渡辺・菊池（2006）は、「一人ひとりがそれぞれのキャリア発達課題（過去・現在・未来の時間軸の中で、社会との相互作用を保ちつつ、自分らしい生き方を展望し、実現していく過程）を達成するとともに、そのことを通して社会生活・職業生活に円滑に移行し、よりよく適応するために必要な資質や能力の育成を目指す総合的・体系的教育」としている。これらをふまえ、本研究では、「自己と働くこととの関係付けや価値付け」に重点をおいてキャリア教育を考えていくことにする。

文部科学省は、キャリア教育推進のために「職場体験」の充実を提言しており、平成17年に「中学校職場体験ガイド」を発表した（文部科学省、2005）。平成20年度現在、「職場体験」は公立中学校の96.5%が実施をしている（国立教育政策研究所生徒指導教育センター、2009）。このガイドには、体験的活動例として「身近な職業聞き取り調査」、「家族の仕事調べ」など所謂、職業調べに類する活動が掲載されている。

戸塚・深田・児玉（2003）は、平成15年に広島大学で行われた進路指導講座において、西日本の各府県の教育委員会や、市町村の教育委員会の進路指導主事などが提出した進路指導に関するレポートを分析したところ、中学1年生の段階で職業調べを実施している割合は45.9%で、職場見学の18.9%や福祉・ボランティア体験の16.2%、職業人による講演会の13.5%などの他の進路指導活動内容と比較して実施率が高いと指摘している。そして、中学1年生の段階からキャリア教育を導入することの重要性を指摘しており、その意味で中学1年生から職業調べを行い、職業の知識を増やすことは非常に重要なことであると考えられる。この指摘は、本研究においても重要なものと考え

た。しかし、単に知っている職業数が増えるだけでは、本来のキャリア教育の目標からかけ離れているのではないかと考える。さらに、職業調べなどを実施し、まとめて終わりという単発的な授業が多い現状は課題と考える。

ここで、我が国におけるキャリア教育について述べていく。本格的な取り組みは平成11年に始まり、平成11年の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との連携の改善について」で、「学校と社会および高等教育の円滑な接続を図るためのキャリア教育（望ましい職業観、勤労観および職業に関する知識や技能を身につけるとともに、自己の個性を理解し主体的に進路を選択する能力、態度を育てる教育）を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」と指摘した。続いて、平成14年に文部科学省が「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」を発足させ、平成16年にこの会議は「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～」を発表した。この中で、「キャリア教育とは、児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育、端的には児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」と定義され、「初等中等教育におけるキャリア教育の推進」が提言された。

文部科学省（2006）は、キャリア教育の推進のために「発達段階に応じた創意工夫あるキャリア教育の展開が必要」とし、「各学校においては、地域の状況、児童生徒の実態を踏まえ、組織的、系統的なキャリア教育が実施できるよう、教育課程を見直し、改善、充実していくことが求められる」と指摘している。こうしてキャリア教育を実践し、適切な評価をしながら改善し、より効果的な教育プログラムを開発するという、すなわち、計画（Plan）を実行（Do）し、評価（Check）して改善（Action）に結びつけるという、PDCAサイクルの重要性を指摘している。授業実践をまとめた研究論文はまだ少ないのが現状であり、より効果的なキャリア教育プログラム作成の実践研

究が求められていると言えよう。

以上の議論をふまえて、本研究では指導案を立案した。指導案の内容は、文部科学省（2006）が提示する中学校段階でのキャリア発達段階とその課題を取り入れて作成した。すなわち、本研究で対象とする中学校段階は「現実的探索と暫定的選択の時期」と位置づけられ、具体的に①肯定的自己理解と自己有用感の獲得、②興味・関心等に基づく勤労観、職業観の形成、③進路計画の立案と暫定的選択、④生き方や進路に関する現実的探索、を促進させることが教育目標とされる。よって、具体的には、職業調べの作業の中で、肯定的自己理解と自己有用感を獲得する（錢谷、2006）と同時に、知っている職業数を増やし、職業に関する知識を身に付けることで、職業に対する意識の向上を目指すことを主目標と位置づけた。職業調べの作業には、コラージュを導入し、さらにコラージュ作品をもとにしてグループ内で発表し合い、集中的なグループ体験を経験しながら職業に対する意識の向上を目指した。

コラージュ（collage）とは、フランス語で糊付けすることを意味し、写真や絵などを新聞、雑誌などから切り抜き、画用紙やケント紙に貼って一つの作品にすることである。もとは、20世紀初頭に生まれた美術の表現技法である。のちに、心理臨床場面において心理療法のひとつとして、精神科の集団絵画療法やリハビリテーションなどに導入され、その後、個人療法にも導入されるようになった。コラージュには、心理的退行、自己表出、内面の意識化、自己表現と美意識の満足、言語表現の補助的要素、診断材料、ラポール・相互作用・コミュニケーションの媒介といった効果があると言われている（杉浦、1994）。中井・森谷（1993）は「ありきたりの図形をまず下見をしてから自分の思うように切り抜く、嫌ならパスすればよい。それ以降でも捨てることはいくらでもでき回避することはできる。」と述べ、コラージュは実施する上で、製作者への心的不安などが低く、実施面での安全性の高さを強調している。さらに、中井ら（1993）は、「最後に作品ができあがったときに、是認し賛美してくれる対象（人物）が必要で

ある。」とも述べており、最後に互いに肯定的感想を述べ合うことの重要性を示唆している。そして、出来上がった作品の説明するために作品のイメージを受け止めることによって、自分自身の内面をある程度意識化することができる（杉浦、1994）とも言われている。

以上のような安全性などにより、現在は教育場面でコラージュを用いる試みがなされるようになったが、先行研究は大学生を対象にしたものが多く、小学校・中学校・高等学校での学級集団を対象とした研究論文は少ない。例えば、鈴木・佐藤（2000）は、授業内コラージュによる作成効果を検討するために、大学生を対象に、コラージュ作成後における心理的退行・自己表出・内面の意識化・自己表現の関連について質問紙調査を実施した。その結果、「自己への理解」「自己への開放感」「楽しさと熱中」「コミュニケーション促進」の4因子が抽出され、コラージュを行った方がこれら4因子が促進されたことを明らかにした。また、白石・則包（2001）は、看護学生を対象とした演習講義の中で、心理療法の一つであるコラージュ療法の体験学習を実施した結果、自己理解と他者理解が促進され、この演習講義は、知識の伝授のみならず、学生の感性に訴える体験学習として有効であったと述べている。佐藤（2003）も、看護教育において効果的に対人援助を学習するために、看護学生を対象にコラージュを用いた体験学習を実施した。その結果、学生が客観的に自己を見つめる機会を得、若干の自己理解・他者理解・相互理解に繋がったと述べている。鳥丸（2007）は、複数のコミュニケーション関連の講義において、自己理解・他者理解・相互理解などを深める手段のひとつとして、コラージュ作成を導入した。その結果、自他理解の促進のみならず、コミュニケーションワークを活性化させるものとしてもコラージュ作成が有効である可能性が示唆されたと述べている。これらの研究において、杉浦（1994）も指摘している通り、コラージュは、作品製作の前に比べ製作後には話しをスムーズに行うことができるというコミュニケーション推進の作用があることが明らかとされている。

以上のことを踏まえて本研究では、中学3年生時に自分の適職候補を見出し、1年後の文理選択に備えることを念頭に置き、文部科学省(2006)の指摘を取り入れ、授業実践計画・授業実行・生徒による授業評価の実施・授業改善を行うこととして、中学1年を対象としたキャリア教育の教育目標である「色々な職業を知る」ことを目標に、夏休みから11月までの事前学習内容と、キャリアガイダンスの指導案の作成を試みた。さらに、授業前後で職業知識と職業に対する意識にどのような変容が見られるかを探ることとした。

具体的には、文部科学省(2006)が示すキャリア教育に関わる能力(後述)の1つである情報活用能力の単元を扱う授業として、Table 1の指導案を実施することで、友人からの職業に関する情報を得て、既知の職業数を増やす機会とし、その結果、生徒の進路成熟にどのような変化が見られるかについて検討することにした。その際には、単に各自で職業調べを行うような授業ではなく、コラージュの作成と、そのコラージュ作品を媒介としてグループ内で発表をするグループワークを取り入れる授業を考案した。コラージュとグループワークを導入した理由は、自己の考えの言語化を苦手とする生徒が増えている近年の状況を鑑み、コラージュを作成することで、職業に対するイメージが把握しやすくなるとともに、コラージュ作品を媒介とすることで職業に対する説明をスムーズにすることができ、また一方で、友人の職業に対する説明を理解しやすい状況を作ることが可能となるのではないかと考えたためである。そして、自己開示しやすい状況が作られ、グループ内発表の促進効果が期待できるのではないかと考えたためである。グループ内において、職業に関する情報の提供を行ったり、情報の提供をしてもらったりして、更に、情報提供の方法などに関する肯定的なフィードバックを行うことで、自己理解・他者理解を深め、単元目標である職業知識の向上と職業に対する意識の向上を目指すことができるのではないかと考えた。グループ体験に関しては、参加者の自己肯定感を高める効果があると言われている(國分・國分、2004)、構成的グループエ

ンカウンターの理論・手法を用いた(日本教育カウンセラー協会、2004)。

この授業の教育的効果については、授業前後に実施する進路成熟態度尺度による質問紙とコラージュ体験後の感想(ジョハリの窓を用いての自由記述)、及びコラージュ作品を分析して検討する。なお、本研究では、質問紙の数量的分析による生徒の進路成熟の変化と授業後の自由記述についてまとめる。

II. 方法

1. 対象者と実施時期

神奈川県内の私立女子中学1年生57名に対し、2007年7月に事前学習を、2007年11月に「キャリアガイダンス」の名目で一斉授業を実施した。授業は、進路指導担当の男性教諭が行った。

2. 事前学習の実施

授業前の2007年7月に行い、授業の説明及び課題を出した。具体的には、①秋に、キャリアガイダンスを実施すること、②その授業で使うため、新聞や広告、雑誌などから、自分に興味がある仕事の内容や職業がわかる絵の切抜きを20枚程度準備しておいて欲しいこと、③切抜きの大きさは、10センチ四方程度が良いこと、④夏休み期間中は、将来やってみたい仕事などを考えながら過ごして欲しいこと、である。課題は、夏休み期間を使って誰もが無理なく取り組めるように工夫した。中学1年生であることから、1つの職業に限定せず、興味ある複数の職業に関する切抜きを探しても良いことも伝えた。

3. 授業の実施

(1) 授業の概要と指導案

2007年11月下旬に、教員の資質向上を目指して行われる校内研究授業としてキャリアガイダンスの時間に行った。授業案をTable 1に示す。

授業前日に、進路成熟態度に関する質問紙を実施した。授業当日は、まずキャリアガイダンスの趣旨を説明した後、各自にコラージュの作成を求めた。作成後、グループ内で発表し合うグループ

Table 1. 学習指導案「コラージュを用いた職業知識と意識の向上」

- 【対象】** 中学1年57名
- 【単元名】** 情報活用能力（キャリア発達に関わる4大能力の1つ）
- 【単元観】** 文部科学省によって提示されたキャリア発達に関わる4つの能力の育成が、進路導・キャリア教育の中心となる。情報活用能力は、今後様々な情報を収集し、進路決定を行っていく上で重要となる能力の1つである。特に、職業理解能力の育成は将来の大学研究を机上の空論とさせないためにも重要である。ここでは、単に職業調べを行うのではなく、コラージュを用いることによって、職業に対するイメージを把握しやすくするとともに、自己開示しやすい状況を作ることで、職業に対する説明をスムーズにすることや、友人の職業に対する説明を理解しやすい状況を作る。
- 【単元目標】** 職業知識の向上と職業に対する意識の向上
- 【その他】** 事前・事後に進路成熟態度尺度を実施し、職業に対する意識の向上が見られるか検討する。
- 【本時の展開】**

時間	指導内容	指導上の留意点
導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 今回のキャリアガイダンスの趣旨と作業内容を説明する。 グループ分けは事前に担任を通じて連絡する。 	<ul style="list-style-type: none"> コラージュの目的は綺麗に作るのではなく、自分の考えを自由に反映させて作るものであることや、人に職業の説明をしやすくするためのものであることを確認する。 コラージュではハサミを利用するので十分注意するよう指示する。
展開 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> 用紙を配布しコラージュの作成をする。 (約10分) 3人のグループ毎に作品に用いた職業・仕事の説明（宿題で調べた内容を説明）と作品のコンセプトの説明する。 (一人3分×3人：約10分) 同じグループの他の2人の作品についての感想や意見を1分ずつ述べる (一人2分×3人：約6～8分) もらった感想や意見をコラージュ用紙の裏面にメモさせる。 感想や意見をもらって自分で感じたことがあったらコラージュ用紙の裏面に記入させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 作品にはタイトルをつけるように指示する。 3分毎に交代の時間であることを伝え、時間をオーバーしすぎないようにする。 作品の感想や意見は相手の良いところを見つけて発言するように例示してから実施する。 コラージュ用紙の裏面にはジョハリの窓を書いておき、もらった感想をパワーポイントで示した分類（自分が気付いている内容、自分が気付いていなかった内容、友達が気付かない自分の気持ち）にしたがって記入するよう指示する。
まとめ (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 今日のキャリアガイダンスの趣旨を再度確認し、今後の進路研究の必要性を確認する。 事後の進路成熟態度尺度を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本日のキャリアガイダンスの内容をきっかけとして自宅で進路に関する話をするように促す。

ワークを実施し、さらに感想の自由記述を求めた。最後に、本日のキャリアガイダンスの趣旨を再度確認し、今回の授業をきっかけとして自宅で進路に関する話をするように促した。そして、授業終了直後に、再度、進路成熟態度に関する質問紙を

実施した。

(2) 質問紙

授業前日と授業終了直後（以下、事前、事後と示す）に、坂柳・竹内（1986）の進路成熟態度尺度による質問紙を実施し、効果の測定を行った。

この尺度は、「教育的進路成熟」と「職業的進路成熟」の2側面と、さらに「進路自律度」「進路計画度」「進路関心度」の3つの下位尺度を組み合わせた30項目で構成されている。本研究では、職業に取り組む態度に関する質問から成る「職業的進路成熟」の15項目を利用した (Table 2, Table 3)。回答は (ア) (イ) (ウ) の選択肢から一つを選ぶ3件法で求められ、(ア) 0点、(イ) 1点、(ウ) 2点で得点化した。なお、項目番号2、4、6、8、10、11、12、13は、逆転項目であり、(ア) 2点、(イ) 1点、(ウ) 0点で得点化した。

(3) コラージュの実施

授業の導入時に、コラージュを作成して職業に対する意識の向上を目指すことを説明した。特に、①友達の作品の説明から様々な仕事や職業を知ること、②友達が仕事や職業にどのようなイメージを持っているか傾聴すること、を確認した。その後、コラージュの説明を行った上で、作成時間を10分間取った。作成後、タイトルを好きな色ペンで書くよう指示し、質問を受けた。

(4) グループワークの実施

3人のグループ毎にコラージュに用いた職業・仕事の説明 (事前に各自が調べた内容を説明) とコラージュのコンセプトの説明を一人3分ずつ行うよう指示した。コラージュの説明終了後、次に同じグループの他の2人の作品についての感想や意見を1分ずつ述べるよう指示した。感想や意見は、発表者の良い部分に焦点を当てて述べるよう注意した。グループのメンバーからももらった感想や意見は、コラージュの用紙の裏面に、①自分が気付いている内容、②自分が気付いていなかった内容、③友達が気付かない自分の気持ち、の3つに分類して自由記述を求めた。これは、ジョハリの窓を用いた (Figure 1)。ジョハリの窓とは、思考・感情・行動に関する気づきの1つ「自己盲点への気づき」を促す性格構造論である。構成的グループエンカウンターなどにおいて、自己理解を目標としたエクササイズを行う際に用いられることが多いため、本授業に取り入れた。

Table 2. 進路成熟態度尺度の構成

	職業的進路成熟：OCM (Occupational Career Maturity)
進路自律度：CA (Career Autonomy)	職業的進路自律度：ECA (Educational Career Autonomy) 進路への取り組み姿勢が、主体的であるか
	Table 3. の項目番号 1、4、7、10、13：計5項目
進路計画度：CP (Career Planning)	職業的進路計画度：ECP (Occupational Career Planning) 将来展望をもち、自己の進路に対して、計画的であるか
	Table 3. の項目番号 2、5、8、11、14：計5項目
進路関心度：CC (Career Concern)	職業的進路関心度：ECC (Occupational Career Concern) 自己の進路に対して、積極的な関心をもっているか
	Table 3. の項目番号 3、6、9、12、15：計5項目

坂柳・竹内 (1986) の表2を参考に作成

Table 3. 職業的進路成熟態度尺度

次の15個の意見について最も当てはまる内容を（ア）～（ウ）から選んで○を付けてください。

1. (ア) 職業の選択や決定は、自分から進んでする。 (イ) 職業の選択や決定は、できるだけ自分でするつもりである。 (ウ) 職業の選択や決定は、誰か他の人（親や先生など）にしてもらいたい。
2. (ア) 志望職業に就けるかどうかは、その時の運によって決まる。 * (イ) 志望職業に就くためには、できるだけ計画を立てることが大切である。 (ウ) 志望職業に就くためには、計画を立て、準備することが大切である。
3. (ア) 最近、将来の職業や就職のことが、とても気になっている。 (イ) 最近、将来の職業や就職のことが、すこし気になっている。 (ウ) 将来の職業や就職のことは、あまり気にならない。
4. (ア) 将来の職業や就職先は、誰か他の人（親や先生など）に決めてもらいたい。 * (イ) 将来の職業や就職先は、できるだけ自分で考えて決めたい。 (ウ) 将来の職業や就職先は、自分でよく考えて決める。
5. (ア) 志望している職業は、よく考えたうえなのでこれから先も変わらない。 (イ) 志望している職業も、その時になれば変わるだろう。 (ウ) 現在志望している職業は、ない。
6. (ア) どんな種類の職業や産業があるのか、あまり関心がない。 * (イ) どんな種類の職業や産業があるのか、すこし関心がある。 (ウ) どんな種類の職業や産業があるのか、とても関心がある。
7. (ア) 志望職業の内容や就職方法などは、自分で調べる。 (イ) 志望職業の内容や就職方法などは、できるかぎり自分で調べる。 (ウ) 志望職業の内容や就職方法などは、先生や親などに調べてもらいたい。
8. (ア) 志望職業は、まだ決まっていない。 * (イ) 志望職業は、前から決まっているが、そのための努力はしていない。 (ウ) 志望職業は、前から決まっており、現在もそれに向かって努力している。
9. (ア) 何のために職業に就いて働くのか、真剣に考えたことがある。 (イ) 何のために職業に就いて働くのか、少しは考えたことがある。 (ウ) 何のために職業に就いて働くのか、あまり考えたことがない。
10. (ア) 将来の職業は、自分一人の責任で決められない。 * (イ) 将来の職業は、できるかぎり自分で責任をもって決めたい。 (ウ) 将来の職業は、自分で責任をもって決める。
11. (ア) 自分が将来どんな職業につくのか、見当がつかない。 * (イ) 自分が将来どんな職業につくのか、少しは見当がつく。 (ウ) 自分が将来どんな職業につくのか、大体見当がつく。
12. (ア) どんな職業を選ぶかは、自分にとってたいした問題でない。 * (イ) どんな職業を選ぶかは、自分にとって少しは問題である。 (ウ) どんな職業を選ぶかは、自分にとって重要な問題である。
13. (ア) 職業に就いてからでも、ある程度は親や先生に迷惑をかけると思う。 * (イ) 職業に就いたら、できるだけ親や先生に迷惑をかけないつもりである。 (ウ) 職業に就いたら、親や先生に決して迷惑をかけない。
14. (ア) 志望職業に就くための道筋が、大体わかっている。 (イ) 志望職業に就くための道筋が、少しはわかっている。 (ウ) 志望職業は、今のところない。
15. (ア) 自分を生かせる職業について、とても知りたい。 (イ) 自分を生かせる職業について、少しは知りたい。 (ウ) 自分を生かせる職業について、知りたいとは思わない。

* は逆転項目

I 開放 自分も他者も知っている領域	II 盲点 自分は気づかないが、他者は知っている領域
III 隠蔽 自分は知っているが、他者は知らない秘密の領域	IV 未知 他者も知らない無意識の領域

Fig 1. ジョハリの窓 (Luft & Ingham, 1969 (星野、2003を参考に作成))

Table 4. 事前一事後での職業的進路成熟態度尺度得点合計と下位尺度得点の変化 N=56

	事前		事後		t
	M	SD	M	SD	
尺度得点合計	17.9	21.4	18.0	24.3	0.48
職業的進路自立度	6.19	3.02	6.12	3.32	0.48
職業的進路計画度	5.95	3.84	5.72	4.10	1.30
職業的進路感心度	5.67	4.69	6.18	4.36	2.48**

** $p < .01$

Table 5. 事前一事後での職業的進路成熟態度尺度の各項目得点の変化 N=56

	事前		事後		t
	M	SD	M	SD	
進路自立度					
第1項目 (職業の選択・決定力)	1.40	0.28	1.41	0.28	0.26
第4項目 (将来の職業や就職先の決定方法)	1.49	0.25	1.35	0.27	2.20*
第7項目 (志望職業の特徴調査方法)	1.14	0.30	1.21	0.24	1.07
第10項目 (就職先決定方法)	1.12	0.29	1.09	0.30	0.63
第13項目 (就職後の親・教師への依存度)	1.04	0.28	1.05	0.34	0.30
進路計画度					
第2項目 (志望職業への就職方法)	1.62	0.38	1.46	0.46	1.84*
第5項目 (志望職業の変容可能性)	1.25	0.33	1.25	0.40	0.00
第8項目 (志望職業決定度)	1.09	0.49	1.04	0.46	0.77
第11項目 (将来の就職先の見通し)	0.93	0.49	0.90	0.41	0.53
第14項目 (就職先への就職方法の見通し)	1.07	0.32	1.11	0.38	0.50
進路感心度					
第3項目 (将来の職業や就職への関心)	0.88	0.56	1.05	0.47	2.20*
第6項目 (職業や産業の種類への関心)	0.91	0.40	1.09	0.38	1.92*
第9項目 (就職に対する意義)	0.88	0.53	0.97	0.42	1.00
第12項目 (自分にとっての職業選択)	1.42	0.46	1.58	0.36	1.92*
第15項目 (自分を生かせ職業への関心)	1.53	0.36	1.47	0.40	0.55

* $p < .05$

III. 結果

授業の事前と事後における職業的進路成熟態度尺度得点の差を検討するために、対応のある2標本に対する両側 t 検定を行った。まず、尺度得点合計と3つの下位尺度の結果 (Table 4) について述べ、次いで、各項目の結果 (Table 5) について述べる。

1. 尺度得点合計について

事前と事後に有意差は見られなかった。すなわち、授業実施前後で、職業的進路成熟態度に変化は見られなかった。

2. 各下位尺度について

「職業的進路関心度」は、事前より事後の方が有意に高かった ($t(56)=2.48, p<.01$)。すなわち、授業後の方が将来の職業や、自分にとっての職業選択など進路に対する関心が高まったことが明らかになった。

「職業的進路自律度」、「職業的進路計画度」については、授業実施前後で有意な差は見られなかった。すなわち、進路への取り組み姿勢の主体性と、将来展望をもち、自己の進路に対しての計画性については変化が見られなかった。

3. 各項目について

15項目の内、有意差の見られた項目について述べる。前述の「職業的進路関心度」に関する5項目中3項目 (第3、6、12項目) と、「職業的進路自律度」に関する5項目中1項目 (第4項目) と、「職業的進路計画度」に関する5項目中1項目 (第2項目) に有意差が見られた。

(1) 将来の職業や就職への関心 (第3項目)

事前より事後の方が有意に高かった ($t(56)=2.20, p<.05$)。すなわち、授業後の方が、将来の職業や就職について気になると感じたことが明らかとなった。

(2) 職業や産業の種類への関心 (第6項目)

事前より事後の方が有意に高かった ($t(56)=1.92, p<.05$)。すなわち、授業後、どのような種類の職業や産業があるのかについて関心が高まっ

たことが明らかとなった。

(3) 自分にとっての職業選択 (第12項目)

事前より事後の方が有意に高かった ($t(56)=1.92, p<.05$)。すなわち、授業後、どのような職業を選ぶかは、自分にとって重要な問題であると認識したことが明らかとなった。

(4) 将来の職業や就職先の決定方法 (第4項目)

事前より事後の方が有意に低くなった ($t(56)=2.20, p<.05$)。すなわち、授業後の方が、将来の職業や就職先は、誰か他の人 (親や先生など) に決めてもらいたいと感じたことが明らかとなった。

(5) 志望職業への就職方法 (第2項目)

事前より事後の方が有意に低かった ($t(56)=1.84, p<.05$)。すなわち、授業後の方が、志望職業に就くためには、計画性や準備が必要だと認識したことが明らかとなった。

IV. 考察

まず、授業実施前後で、職業的進路成熟態度に大きな変化は見られなかった。坂柳ら (1986) の研究では、女子中学生の職業的進路成熟態度の総合得点の平均値は14.78で、女子高校生の平均は17.19で有意に高い結果が見られた ($t(249)=5.81, p<.001$)。そして、職業的進路成熟態度は、中学校段階から高校段階へと顕著な伸びが見られ、発達の側面が反映していると述べている。本研究では、事前の平均値が17.9、事後の平均値が18.0で有意差は見られなかったが、これは、坂柳ら (1986) が指摘しているように、1度の授業で変化が見られるようなものではなく、長期に渡り授業を実施することで向上することが期待できる。さらに、学年が上がるにつれて発達の変化も期待できるものと思われる。

下位尺度を見ると、職業的進路関心度は高まったことが明らかとなり、さらに、各項目を細かく見ていくと、授業後に、将来の職業や就職に対する意識、職業や産業の種類への興味・関心、職業選択の重要性への認識が高まったことが明らかとなった。よって、本研究の目的であり、本授業の単元目標とした「職業知識の向上と職業に対する意識の向上」が達成できたと考えよう。国立教育

政策研究所生徒指導センター（2003）は、中学校段階の主な発達課題として、肯定的な自己理解や自己有用感を獲得し、興味・関心や職業に関する基礎的な知識・理解等に基づく選択基準を形成することなどを挙げている。それをふまえて考えると、中学校段階の主な発達課題の一部が遂げられたとも言えよう。この結果は、授業前に課題を出したことで、家族と職業に関する会話をすることとなり、キャリア教育の下準備をすることができたこともプラスに影響していると思われる。また、興味ある職業の切抜きを探すという課題に取り組むことは、すなわち必然的に自分の将来について考え、職業選択を経験している家族と相談する機会を得ることとなり、それがやはり職業的進路への関心を高める方向に影響を及ぼしたのではないと思われる。ここで、コラージュ作成についての自由記述を取り上げてみると、コラージュを用いて他者が職業の説明をするのを聞いて「切抜きの写真がわかりやすかったため、その職業に関する説明がわかりやすかった」、「たくさん写真を貼り、めずらしい仕事がわかりやすく、人物に言葉をつけたりして、よりわかりやすかった」、「切抜きの貼り方が良かった」などの記述があった。これらより、コラージュを媒介としたことにより、言語のみの発表よりも他者の説明がよりわかりやすいものとなったことが伺える。さらに、「仕事内容が良くわかった」、「自分たちにとって必要な職業だとわかった」など、写真の切抜きといったイメージがしやすい媒体によって、言葉だけでは理解の難しい様々な職業の理解を促進させたことが伺える。さらに、「少し声が小さく、写真をあまり切り取らなかったけれど、コラージュは見やすかったと思う」や「自分の夢に直接関係ある切抜きを持っていくことができなかったので、あまり上手に説明できなかった」という記述もあり、コラージュが一助となって、他者に説明する際の自信につながった可能性も伺える。このように、コラージュには、自己の内面にある職業に対するイメージを意識化させ、自己理解や進路関心の促進に効果があったのではないかと考えられる。残る2つの下位尺度である職業的進路自律度と、

職業的進路計画度については有意な変化は見られなかった。今回の授業は、職業を調べることにより職業意識を向上させ、進路への関心を高めることに重点を置いて実施したので、職業的進路自律度や職業的進路計画度の2尺度について有意な差が見られないことは予想の範囲内のことであった。

逆に、就職活動や就職先決定への依存心が高まるという結果も明らかとなった。これは、小学校を終えたばかりの中学1年生という時期にある生徒が、今までキャリアについて深く考えたことがなかったがゆえに、この授業を通じて真摯に自己に向き合い、自己や自己の将来について考えさせられる機会となり、将来についての認識が漠然としている学年であるがゆえに、不安感を強めたのではないかと考えられよう。そして、その不安解消のために、進路決定を他者に委ねたいと感じたことが結果に表れたものと考えられよう。さらに、公立との比較を実施していないため、あくまで推論ではあるが、授業実施校が私学であることから、中学受験において家族や塾に自らの進路を託すような経験をした者もいるため、進路決定を他者に委ねたいと考える傾向が強いのではないかと筆者の現場経験から感じられる。進路に対するイメージがつかめない生徒であればあるほど、このような授業において不安が高まるとも考えられる。よって、生徒の不安低減のためにも、本研究で行ったように、授業前に事前学習や事前説明を行ったり、将来のイメージを明確化し、他者と共有化できるような媒介としてコラージュを用いたりすることが有用であることが示唆されたと考えられよう。

最後に、グループワークに関する自由記述に、「自分のなりたい仕事は、有名な仕事ではないけれど、他の人たちは結構関心をもっていたので、驚いた」、「自分で職業の事を言ったことがなかったが、こうして職業について考え、どんな職業があるかわかって良かった」、「自分のなりたい職業について他の人たちの意見を聞く機会がなかったので、とても良い機会だった」、「こういう機会をきっかけに、詳しく職業を知ることができるのは良いと思った」など、グループワークからプラスの影響を受けたととらえられる記述があった。さ

らに、他者の発表を聞き、「好きなものに向かっているところが良かった」、「夢があってすごい」、「その人らしい仕事を選んでいる。似合っている」など、他者理解の促進が伺えたり、「就職するのが大変な職業だが、目標に向けて頑張る」、「将来に向かってこれからもどんどん調べたり、知りたい」という記述もあり、グループワークにより職業調べの意欲が促進されたことが伺える。こうして、グループでの発表を通じて自己肯定感を高めるとともに、自己理解を深めることにもつながったことが伺える。さらに、他者の発表により、新たな職業の知識を獲得し、それが他者理解、及び、職業的進路関心を高める方向に影響を及ぼしたとも考えられよう。

V. 今後の課題

コラージュ作成後の自由記述とコラージュの切り抜き内容や切り抜き数などとの関連について分析を行い、コラージュ作成のどのような側面が職業意識の向上にむすびついたのか検討することが今後の課題である。

また、夏休みに興味ある職業に関する切り抜きを探させる課題を出したが、家族内で将来の職業に関する会話がどの程度行われているか調査しなかった。今後は、切り抜きを探させるだけでなく、その切り抜きについて家族で話をすることも課題として導入し、夏休み明けにどの程度の時間を、将来の職業に関する会話に費やしたか、どのような話が展開されたかなどを調査することも検討していきたい。

引用文献

- 青島祐子 2001 女性のキャリアデザイン 学文社
- 星野欣生 2003 人間関係づくりトレーニング 金子書房
- 金井壽宏 2002 働くひとのためのキャリア・デザイン PHP 新書
- 國分康孝・國分久子 総編集 2004 構成的グループエンカウンター事典 図書文化
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2003 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2009 平成20年度 職場体験・インターンシップ実施状況等調査の結果について
- 文部科学省 2004 キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～
- 文部科学省 2005 中学校職場体験ガイド
- 文部科学省 2006 小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引 一児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために一
- 中井久夫・森谷寛之 他 1993 コラージュ療法入門 創元社
- 日本教育カウンセラー協会 2004 教育カウンセラー標準テキスト（初級編） 図書文化
- 坂柳恒夫・竹内登規夫 1986 進路成熟態度尺度（CMAS—4）の信頼性および妥当性の検討 愛知教育大学研究報告、35、169-182.
- 佐藤仁美 2003 看護教育におけるコラージュ活用の試み 心理臨床学研究、21、167-178.
- 仙崎武・野々村新・渡辺三枝子・菊池武剋 編著 2006 生徒指導・教育相談・進路指導 田研出版
- 白石裕子・則包和也 2001 精神臨床看護論演習におけるコラージュ療法の活用—学生の自己理解・他者理解の促進をめざして— 香川県立医療短期大学紀要、3、141-147.
- 杉浦京子 1994 コラージュ療法—基礎研究と実際— 川島書店
- 鈴木由美・佐藤いづみ 2000 大学生の授業内コラージュ作成が及ぼす心理的効果の研究 聖徳大学研究紀要 短期大学部、33、57-62.
- 戸塚唯氏・深田博己・児玉真樹子 2003 中学校における進路指導の実践—平成15年度進路指導講座資料の分析— 広島大学心理学研究、3、177-201.
- 鳥丸佐知子 2007 コミュニケーションワーク活性剤としてのコラージュの有効性について 京都文教短期大学、46、109-119.
- 中央教育審議会答申 1999 初等中等教育と高等

教育との連携の改善について

吉田辰雄 2006 最新 生徒指導・進路指導論—
ガイダンスとキャリア教育の理論と実践—
図書文化

吉田ゆり 2001 人間関係体験学習におけるコラ
ージュの導入—コラージュ作品に見る女子短大
生の自己表現— 鹿児島純心女子短期大学研
究紀要、31、167-189.

銭谷眞美 2006 中学校職場体験ガイド 文部科
学省 HP

付記

論文作成にあたり、調査にご協力くださった中
学校の教職員並びに生徒の皆様に心より感謝申し
上げます。

要旨

本研究では、中学1年生57名を対象としたキャ
リア教育の指導案の作成を試み、職業知識や職業
に対する意識の向上が見られるかどうか検討する
ことを目的とした。

具体的には、情報活用能力の単元を扱う授業に
おいて、単に職業調べを行うのではなく、コラ
ージュを導入し、コラージュ作品をもとにしてグル
ープで職業に対する話し合いをするというグル
ープ内発表の促進効果を期待した指導案を立案した。
授業前後には、進路成熟態度尺度を実施し、授業
の効果を検討した。

その結果、授業後に、将来の職業や就職に対す
る意識、職業に関する興味や関心、職業選択の重
要性への認識が高まり、本研究の目的が達成でき
たと言えた。 (2009.10.05 受稿)